



神林博史

東北学院大学人間科学部
教授

本書は、社会調査士カリキュラムA・B科目に対応した社会調査法の教科書である。結論から先に述べておくと、未読の方はぜひ一読をお薦めしたい。量的調査を中心にA・B科目を教える・学ぶのであれば、本書は教科書・参考書として有力な候補となるだろう。

本書の特徴は2つある。1つめは、264ページと比較的コンパクトな分量の中で、豊富な事項を扱っていることである。社会調査法の標準的な項目のみならず、海外調査事情(第24章)、調査倫理と法(第25章)など、既存の教科書では触れられることの少ない、しかし重要なテーマを扱っている点も見逃せない。2つめは、具体性の重視である。社会調査の各プロセスの解説は、ともすれば抽象的で無味乾燥なものになりがちだが、本書では図表や資料を多用することで読者に具体的なイメージを伝える配慮が徹底されている。

これらの特徴が発揮され、本書の大きな魅力となっているのが電話調査とサンプリングの解説である。

マスメディアが実施する世論調査の多くが電話調査であることに象徴されるように、電話調査は現代の主要な社会調査法の1つである。しかし、電話調査の実施経験のある大学教員はそれほど多くないと推測されるし(じつは評者も経験がない)、社会調査実習や卒業論文で調査を行う場合、電話調査はおそらく最も選ばれにくい方法だろう。このため、既存の教科書では電話調査の解説は通り一遍の表面的な説明になりがちである。これに対し、本書では著者の経験を生かして電話調査の方法が具体的かつ詳細に解説されている。学生のみならず、電話調査の経験のない教員にとっても大いに参考になるはずだ。

次にサンプリングだが、無作為抽出法はその性質上数学的な説明を避けられない。教科書によって

は数式が延々と並ぶものもあり、数学が苦手な学生にはハードルが高い。また、無作為抽出法には多くの方法があるが、それらの違いをきちんと説明あるいは理解するのはなかなか骨が折れる。本書では、数式の使用は必要最小限にとどめ、図表を多用することで無作為抽出の諸技法の具体的なイメージと違いが把握しやすくなるよう配慮されており、学ぶ側・教える側の双方にとって有用である。

もちろん、優れているのは上記2点だけではない。情報量の多い本だが、多岐にわたる事項が手際よく解説されているし、全27章と章立てを細かくすることで読者の負担軽減に配慮した工夫もよい。著者の見識と手腕が遺憾なく発揮されているように思う。

以上のように本書は優れた社会調査法の教科書と言えるが、ないものねだりをすると、本書の内容とA・B科目との詳しい対応を示してほしかった。A・B科目の概要は本書でも説明さ

れているが、さらに踏み込んで、各章・各節のタイトルにA・B科目のどちらに該当するかを示すマークをつけるとか、A・B科目と各事項の詳細な対応表を設けるといった工夫があれば、教える側にも学ぶ側にも親切であり、本書の有用性はさらに高まるだろう。

もちろん、A・B科目の枠内で何を教えるかは大学によって事情が異なるので、各科目の学習内容を一律に定めることは難しいかもしれない。とはいえ、A・B科目対応を謳うのであれば「著者が本書を用いて授業を行うなら、このように対応させる」的な履修モデルがあっても罰は当たらないように思う。そのような情報を欲しているA・B科目担当者は、意外と多いのではないだろうか。



社会調査の方法論

松本 涉 著

丸善出版
2021年
A5判, 264頁
3,000円+税